

授業・これだけはぜひ

—教育実習生と新任教師のために—

竹中 輝夫

一 子どもを受け身（受動的）の姿勢にすることは、授業の生命（魂）を失わせてしまうことである

- 子どもたちが生き生きと眼を輝かせて、積極的に取り組んでいること
- 一人ひとりが、その一時間の勉強のめあてをとらえていること
- 教師は、子どもをひっぱる機関車になるのではなく、子どもの可能性を引き出し、掘り起こしてやる吸い上げポンプになること。特に、呼び水（動機付け）のし方を工夫すること

二 子どもに思う存分（精一杯）話したり、考えさせたり、試みさせたりする場や機会（時間）を与えてやるのが大切である

- 教師のしゃべりすぎはよくない→必要最小限・ポイント
- 教師の言いたいことが、子どもから出てくるようにならないか
- 子どもの問題意識が十分に熟している場合の教師の綿密な説明は有効である
- 子どもは、精一杯自分の力を出し切ることによって伸び、自分を磨くことができる。中途半端はよくない。子どもから、例えばこんな言葉が出てくるようであればダメだ
「先生、ちょっと待ってよ」
「先生は、ひとりで先へ先へと進んでしまう。わたしは、もうついていけないよ」
「先生のお話、ぼくは分からないよ」
「先生ばかりしゃべらないで、わたしたちにも言わせてよ」

三 一問一答式授業からの脱皮、脱却

- 教師と子ども、子どもたち同志で、共に学ぶというかまえ→同志同行
- 子どもの発言→「先生に言うのではなく、みんなに……」
「先生の方を向くのではなく、みんなの方を向いて……」
- 学習の社会化—ひとりの発言がみんなにひびくように→共同学習
「○○君、今、Aさんは何と言ったの。どんなことを言ったの……」

「今、Aさんの言ったことを、もう一度言って下さい」

「Aさんの言ったことについて、どう思う？」

「今、Aさんの言ったこと、分かったかな？」

「もう少しわかりやすく言ってあげられる子」

四 授業は教師の助言を得ながら、子どもたちが協力してつくりあげていくのだという考え方が大切

- 「Aさんがよい知恵を出してくれたから……」「B君がまちがいや失敗をしてくれたから」
→「そのおかげで、みんなよく分かった、一步進めた」という意識を持たせる
- 「まちがっていてもよい。思い切って発表するように」（まちがったことを言うと笑われる。おまえそんなこと分かんのか……等は不可）
- わからないこと（先生の言ったこと、友だちの言ったことに）をどんどん出すように
- 自分のつまづいていること、つまづいていたことをどんどん出すように

五 間に留意（間がない、間延びする……等はよくない）

- じっくり考えさせる
- 「ハイ、ハイ」とすぐ挙手する子には、「みんながもう少し考えるまで待ってあげて」と待たせる
- 「今度は君が一番あとで発表してあげて」
- 「となりの子やグループで話し合ってみなさい」

六 教師の言葉、子どもの言葉

- 教師—正しい言葉、声の大きさ、緩急、大小、抑揚（一本調子ではない）
- 子ども—みんなに届く声、語尾をはっきり

「しまいまではっきり言ってごらん」

「もう一回、言い直してごらん→だいぶん分かった」

「もう一回、ああ、よく分かるようになった」

- 教師が子どもの不十分な発言を、見逃したり、補足したりするのはかえって不親切になる
- 教師の発問は、漠としていてはダメ

めあてを具体的に持つ→ポイント

子どもの発言をとらえるための、大きな網の目—中くらいの網の目—細かな網の目の用意

七 板書はゆっくり、ていねいに

- 教師の文字は、子どもに伝染する。教師は書写の模範のつもりで書いてちょうどよい
- 無秩序、断片羅列は感心しない

八 子どもに板書させる機会や場、内容を工夫すること

九 重要な個別指導

○「今日はこの子とこの子を特に……」

「今日はこの子に何を、この子にはこれを……」

の着眼を忘れないこと

- 一人ひとりのつまずき、盲点、考えなどをとらえる工夫。

変化をとらえる工夫（ノート、座席表、カルテ、作文等の記録）

- 机間巡視

めあてを持って つまずきを知る

考えを知る 分からせる

- 手を挙げた者だけに指名して言わせるのではなく、時には全員に言わせたり、「この列の人みんなに、言ってもらいましょう」等々の工夫
- 子どもが記したことを、みんなの前に取り上げてやる工夫（特に、あまり発表しない子、おくらせている子のもの）—まちがっていても、不十分であってもほめてやること
- ほめてやれることを見つける眼を育てること

十 教室は清潔で整頓されていること

- 掲示ひとつにしても、美的な着眼を
- 勉強する雰囲気が漂うように
- 子どもの机と椅子の適合—書く時の眼と机の距離、姿勢にも留意

（神奈川・評議員）

（竹中輝夫『竹中輝夫・教育論選集』 2000年より）